
ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～

アンサバック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔〜元係長よ永遠に！〜

【Nコード】

N7282Y

【作者名】

アンサバツク

【あらすじ】

落雷死した中年おやじが、異世界転生、とある人物に憑依した。憑依先がゼロの使い魔の世界だと知った主人公は、自分の記憶している原作知識を頼りに、てきとうに物語を推理し、勝手な思い込みで行動していく。中年おやじ！ハルケギニアを逝くシリーズ第1段、はたして中年おやじは生き残る事ができるのか？・・・この作品は作者の練習作品です。また、作者の自己満足のため、ネタバレなどもある駄文になっています。それでも構わないと思う方は読んでやってください。

第1話（前書き）

いまさらって感じもしますが、投稿してしまいました。退屈な回想
もどきですが、お暇な方は読んであげてください。

第1話

「信じられないよなあ、あの係長が亡くなるなんて…」

「ああでも、らしいっちゃ、らしいよな、落雷死だもんな、普通考えられねえよ」

「うう、僕、一生係長について行こうって、思ってたのに…」

「嘘つけ、おまえっ！係長、半年も前に辞めてんじゃない」

「ああ、ホント突然だったよなあ…まさかの課長昇進か？なんて噂があつたっけ…」

「そうそう、それぞれっ！それまで、ただのセクハラおやじだっと思ってたのに、急にだよな3年前、人が変わったように」

「あれ？お前知らなかったのか、係長きれいな奥さんと娘さん、事故でいっぺんに亡くされたの」

「ううっ、きつと哀しさ埋めるために…仕事で、うう」

「そうだったのかあ…でも懐かしいなあ、地獄の3年間だったけど」

「そうだなあ…業績もハンパなく伸びたもんなあ…」

「ぐすっ、でも今では…見る影もなくなっちゃいましたね…それに課も無くなっちゃいましたし」

「それにしても、すごい参列者だな…1000人はいそうだな」

「なんかアブなそうな奴らがいるかと思えば、絶対、どこぞの社長だつてオーラ出まくりの人達もいるし」

「ああ、あそこに居るのは、名前は思い出せないけど某有名企業の社長さんだな、こないだ雑誌に載ってた」

「いったい、どういう人間関係なんだろうな」

「ぐすつ、知らないんですか？係長、宗教団体入ってたの。遺言で2億寄付するつて、世界の為に使つて貰うつて…」

「「2億っ！」「」」

「しいゝゝゝ、ぐすつ」

「「……」「」」

「コホンっ、しかし、遺言つて、イサ気好いのか、好くないのか…それに信じてたのかも微妙だよな…」

「ホント不思議な人だった、都合悪くなるとすぐ、フツ、聞こえんなあゝ、悪党どもの鳴き声はあゝ、だったもんな」

「あつ、なんか似てる…不思議といえば、絶対セクハラでクビになると思つてたもんな、俺…」

「そうそう、社内でも超ベツピンの女性社員の胸とかお尻あんだけさわつてて…嫌がられてなかったんだよなあ」

「ぐすつ、係長には美学があつたんです」

「美学ってお前っ…常にわけわからん、誇大妄想としか思えん工口話しかしてなかったじゃねえかつ」

「まあ、もう亡くなった方のことだ、あんまり悪く言わない。それに、その女性陣も参列に来てるんだし」

「あ、ホントだ。秘書課の南女史、前島女史、それと高部さん、総務の近藤さん、水無月さん、え」と

「うちの課の栗原に南雲だ。それと、お前の課の藤間さんだな」

「うーん、社内で評判の、デキる女性陣達に見送られて、係長も本望ってところかな」

「そろそろ、お焼香、僕達の番みたいです。最後の挨拶にいきましよう、ぐすっ」

「」「ああ…」「」

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「とっ、…結局、一睡もできなかった。まあ、それも仕方ないか」

綺麗な朝焼けだ。

これからの『クラウド』としての人生、未来を照らし輝かしてくれ
たらいいのだが…。

幸い、それなりに原作知識はある。

それに、一晩考え抜いた？結果、オレは、このハルギニアで生きて
いくときめたのだから。

しかし、まさか自分が異世界転生、憑依するなんてな。
しかも、平賀才人にである。

まあ、実際はどんなのかは判らないが原作での描写やイラストの記
憶。

そして状況や服装でそういう事なのだろうと思っている訳だが…。

正直、複雑な心境でもある。

なぜなら、ひとつは純粋に、オレのスローライフを返しやがれっ、
このっ、すつとこどっこいつ！である。

3年かかったが精神的にやっと立ち直り、これからというところで
この現状…。

もうひとつは、あのまま何十年か掛けて、虚しく朽ち果てていく可
能性が高かった前世の記憶があるからだ。

それに幸か不幸か、前世での自分の家族、友人、知人などの名前、
容姿など酷く曖昧ではつきりと思いつけない。

それ以外はそれなりの記憶がある。

なんせ、自分が死亡する記憶まであるのだから…。

まあ、これは強烈だからあたりまえか…。

……………

…

…

オレの死因は落雷死だ。

高速道路のPAで車がパンクしてるのに気付き雨の中、応急用タイヤに交換してたのだ。

作業中ふと、空を見上げると雨雲が白く光った。

そして、一条の光がオレを斜めに貫きブラックアウト。

稲妻が迫ってくるときの体感時間はかなりゆっくりと感じられた。頭の中では、早く逃げろと命令してるのに体はまったく反応できなかった。

意識を失う寸前、なんか小説みたいだな、とか思える冷静な自分が少し可笑しかった。

どれくらい眠ってたのか、ざわつく周りの気配とそよぐ風、土の匂いや草の香りを感じ、覚醒感にみまわれた。

疑問に思いつつも目を開けると最初に飛び込んできたのは、青い空、空高くにある一片の白い雲。

明日もきつといい天気なんだろうなあ、などと呑気に考えていたりもした。

冷静に振り替えてみると実際、余裕があったのはここらあたりまでだ。

「アンタ誰？」とかかわいい声が聞こえたので起き上がろうとした時だった。

突然、頭のとっぺんから足の爪先まで、なにかになぞられた感じがした。

はつきりいつてびつくりである。

おそらくアレはディテクト・マジック。

コルベールがオレに魔法をかけたのだろう。

そのおかげで、オレの新しい器官というべきか、能力に気がつけたのだが…。

なんだ今のは？という疑問と同時に自分の体の中や周りに何か得体の知れない物があるのに気がついた。

体を起こし状況確認してみれば、目の前に異国の美少女。

周りには、同じ服装の少年、少女。

極めつけは、動物や初めて見る生物が飛んでたりする。

異世界召喚？体内にあるのは気とか魔力なのか？しかも体外に溢れ出ている？

それに、視覚、聴覚、嗅覚が異常に鋭くなっている。

夢とは到底思えない。

視覚、聴覚に飛び込んでくる情報が、嫌が応にも現実だと伝えてくる。

平民、召喚など不穏なキーワードに頭が敏感に反応し、さまざまな考えが浮かんでは消える。

はつきりとした記憶はないが、このとき原作通りの展開が繰り広げられていたのだろう。混乱と思考の海に沈みこんだオレが現実に戻ったのは、美少女が目を睨り、オレにキスをする寸前だった。

結局、ゼロの使い魔の世界だと確信したのは、お互いの自己紹介が終わったあとだった。

といっても、オレの場合は名前の記憶もなかったので、クラウドと名乗っただけなのだが。

本当はクラウドと名乗りたかったのだが、気恥ずかしくなり、まあそうなった。

雲になれなかった男、というわけだ。

その後は、当然殴って貰おうとも思わず、気絶もせず、彼女の部屋まで二人で歩いて帰った。

余談だが、オレの傍に落ちていた鞆はなんとかルイズにプレゼントする事ができたと言っておこう。鞆の中身を確認してみると、やはりノートパソコンだった。

まあ、オレの物でもないし、邪魔だったというわけだ。

たかが落ちてる鞆ひとつで、意外に時間と労力を支払わされた。けっして、オレだけの所為ではない。

ルイズがルイズたる所以であろう。

それに、この時点での彼女は追い詰められていた？だけに許容範囲ともいえる。

なんにせよ、ルイズのキャラが原作と同じなのだという事に感動もできたし、安心もできた。

半信半疑ながらも鞆を大事そうに抱え、それでいて毅然として前を歩くルイズ。

そのうしろ姿を見ながら、さて自分の事をどう説明しようか？などと悩みつつ彼女についていった。

第1話（後書き）

お読みいただき、ありがとうございました。3話連続回想もどきになります。あと2話、退屈かとは思いますが、お付き合い頂ければ幸いです。

第2話（前書き）

回想もどき召喚当日第二段です。

才人とは違い、もし気絶してなかったら？

まあ結果的には…

第2話

ルイズの部屋に着いてからが大変だった。

まず部屋に入り、偶然自分の姿を鏡で見た時だった。

咄嗟に声を出さなかったのは、日頃の習慣のおかげだろう。

なぜなら鏡の中に見知らぬ十代後半の青年が映っていたからだ。
これにはさすがに驚いた。

オレは年齢38歳、さえない中年おやじとの自覚があるからだ。
さすがに容姿の記憶が曖昧だったとしてもこれくらいは分かる。
それが、鏡の中のオレは若くなっていた。
それにかつこよくもなっていた。

日本人としては男前の部類に、はいるだろうか。

服装も青いパーカーに黒のズボン。

原作イラストに描かれていた服装に似ている。

この時ようやく、自分が平賀才人になっているのに気がついた。
まあ、雷に貫かれて五体満足なわけ無いわな。

鏡を見ながら、しばらく呆けていたのであろう。

段々冷静になり、ネット小説なんかでもよくある展開じゃないか。

我ながら、もつと早く気づけよな！などと思いながらニヤついていると、殺気を感じた。

横合いから、ルイズの右ストレートが飛んできているではないか。
しかも、ゆっくりと！

ルイズの怒った顔にも一撃必殺がこめられているのがみてとれる。

動体視力が良くなつたとかいうレベルではない。
まるでスローモーション映像のように…。

あの落雷の時に似た感覚をオレは感じた。
ただ違うのは、オレが普通に動けるところだ。

その気合の入ってそうなパンチをアッサリかわし、腕が伸びきった
ところで手首を掴んだ。

途端に時間が通常の流れに戻り、オレは内心驚いた。
それでもなんとか、つんのめりそうに為ってるルイズの体を支えて
やり、殴りかかってきた理由を聞いてみた。

ルイズが言うには、ご主人様である自分が何度も呼びかけてるのに
無視し続ける。

拳句の果てには鏡を見ながらニヤついてる気持ち悪い使い魔にオシ
オキを！とのことだった。

まあ、ある意味正当な理由でもあった。
甘んじて受け入れるつもりはないが…。

とりあえず謝り、話題を変えようと呼びかけた理由を尋ねた。
どうやら、このパソコンとやらで異世界から来た事を証明してみな
さい！とのことだった。

ぶつちやけ、素直に従わない生意気な使い魔をなんとかギャフンと
言わせ、ご主人様と認めさせたいのだろう。

実際、オレは使い魔をする気はない。

使い魔のフリなら考えてもいい、扱いが悪ければすぐに出ていく！
と断わり続けている。

かわいそうかなと思う部分もあるが、譲るわけにはいかない。

ただ、どこまでも上から目線のルイズはやっぱりかわいいつ！と思えた。

べっ別に、つつ、つ、使い魔になってあげてもいいんだからっ！な
どと思えてくる自分にも不安も感じていた。

パソコンはルイズにあげたのだから、使えるようになってもらう為
にも本人に触りながら覚えてもらう事にした。

これは、パソコンに限らず昔からのオレのやり方、覚え方でもあり、
指導方針でもあった。

物を覚えるには、経験もしくは実体験に限る！

見るだけよりは、触れて、見よ！である。

だがしかし、習慣とはおそろしい！

オレは人に物事を教えるのは得意ではない。

因みに教わるのも苦手だったりする。

これは学生時代から治らない、一種の病気みたいなものだ。

口調がぶっきらぼうになったり、突き放したかんじになったりする
のだ。

なんとかルイズを説得し、パソコンを開き電源を入れるところまで
はうまくいっていた。

マイピクチャに入っているであろうサンプル画像を見せようとダブル
クリックを教えていた時だ。

なんとなく、口調が突き放したようになってしまった。

そこから言い争いが始まり、格闘モードに突入した。

言い合い罵り合ってる内容は、他愛の無い内容なので割愛させて頂
く。

ルイズのパンチやキックをしばらくの間、軽く捌いているうちにオ

レはある事に気付き冷静になっていった。

無口になったオレに気付いたのであるう、ルイズも攻撃を止め、肩で息をしながら睨みこんできた。

しばらくお互い無言で睨みあった後、ルイズが先に折れ、諦めたように机に座りパソコンのマウスに手を添えた。

その後、3度目のトライでコツを掴み、簡単にサンプル画像を見ることができた。

結局、サンプルミュージックを聴いてる途中でバッテリー切れとなり、パソコンは使用不能になった。

この時のルイズは落胆と怒りが混ざりあった表情だったと言っておこう。

彼女にしてみれば、オレはただの平民だろう。

その平民の使い魔を、高価で珍しい道具をもった平民の使い魔へと少しでも上方修正したかったのであるう。

貴族として、メイジとして劣等感に押し潰されそうだった自分が初めて魔法に成功したのだ。

平民と分かりガツカリしながらも、それでも期待したい気持ちがあるのは人間として当然だろう。

まして人生経験の浅い十代のうら若き少女なのだから。

それが文字すら読めない、使い方も微妙、意味不明な道具。

しかも今後まったく使う事ができなくなった異世界の道具だと言いつける平民。

更にその使えないパソコンとやらが10万エキューもするなどと…騙されたと思ったであろう。

この時めでたくオレが『平民の使い魔』から『嘘つきな平民の使い魔』へとルイズの中で認定された瞬間だった。

鞆の中身を確認した時、パソコンを10万で買ったと適当な説明をしてるので嘘つきとはあながち間違っていない。

ただ10万エキューのくだりは、お互いの通貨単位の認識の違いによる不幸な事故だと思ってる。

草原で話し合ってる？途中でその事には気付いたが、説明するのも面倒くさくなり放置したのだ。

この後ルイズは怒りながら夕食、入浴にいくと告げ、部屋で反省でもしてると言わんばかりに鍵をかけて去っていった。

当然、オレはルイズを騙した罰として晩飯抜きにされてしまった。

しかし、ルイズはいつたい、何をしたかったのだろうか？

この部屋は当然、中から鍵を開けられるのだが…。

まあそれはともかく、このパソコンには最初から最後まで振り回されっぱなしだった。

いったいどこまで崇まれるのやら…まあしかし、収穫もあった。

オレの体内に流れている得体の知れない物の正体が解った。

そう、それは電気だった。パソコンの電源ボタンをルイズが押したとき違和感を感じ、ジャレ合ってる時にソレに気付いた。

あの時、無口になったのもバッテリーが残り少ないことに気付き、なぜ、そんなことまで判るのか？

また、オレなら充電もおそらく簡単にできる。

そんな思考に捉われたからだった。

しかし、この時のオレは平賀才人に無かったこの能力への興味よりも、もっと深刻な欲求があった。

それは、人間の誰にでも起こる生理現象、尿意をもよおしていたのだ。

そしてここは女子寮、トイレが有るか無いか分からないが、どちらにしても使用不可能なのだ。

女子寮から飛び出し、とにかくオレは人気のない物陰を求め走り出した。

異世界の二つの月に照らされながら…。

第2話（後書き）

魅惑の女子寮トイレっ！作者的には、すごく気になってたりします
…

第3話（前書き）

回想もどき第3段、元中年おやじ徹夜するっ！の回。よろしければ、
どっぞっ！

第3話

なんとか小用を終え一息つけたオレは、このルイズのいない自由な時間の使い方を考えた。

まず夕食はルイズの宣告も含め今の状況では、もはや絶望的だろう。

食堂の位置はわかる。

この学院の中心にあり、一番背の高い本塔の1階だ。

しかし、原作描写通りルイズのセリフが正しければ入室もできないだろう。

平民認定され、しかも若返ってる今のオレでは…

飯に食堂を抜け、または、裏口を発見し厨房にたどり着けたとして、どうすればいいというのだ？

夕食時のごった返した厨房…。

知り合いも居なければ、オレの存在すら知られてはいまい。

誰？お前、何？コイツ状態だろう。

その中へノコノコ赴き、自分の事や現在の身の上をうまく説明し食事にありつけるだろうか？

また、うまく事が運び食事をだされたとして、オレはそこで食事を食べる事ができるだろうか？

厨房の片隅とはいえ、戦場と化した彼らの職場、聖なる領域だと思える。

その職場で忙しく働く人々の姿を目の当たりにし、ただ一人、食事を摂るなど…

プロセスとゴールイメージ、どちらもハードルが高いと思った。

ひるがえって、入浴はどうであろうか？

こちらはなんの問題もなく簡単にいくのではないだろうか。

原作では2種類のお風呂が描かれている。

ひとつは、大理石でできたローマ風呂のようなつくりで、プールのような大きさの浴槽がある。

その大きな浴槽に香水の混じった湯が張られ、天国気分が味わえる貴族専用の豪華なお風呂。

もうひとつは、掘っ立て小屋のようなつくりのサウナ風呂。

焼いた石が詰められた暖炉の隣に腰をかけ、体を温めながら汗を流す。

十分に体が温まったら、外へ出て水で汗を流す、学院で働く平民用の共同風呂。

おそらく学院内で働く平民の人数は少なく見積っても2000人は超えるのではないだろうか。

でなければ、この施設の管理、運営に支障をきたすのは容易に想像できる。

この施設に加え、ここにいるのは教師、学生、全員貴族なのだ！

その300人前後が暮らすであろう貴族達の宿泊サービス、それに警備、馬などや乗り物、はては使い魔まで…

その生活すべてのお世話をしなければいけないとなれば、500人いても不思議でない。

しかも水道設備もなければ、便利な電化製品もない、通信伝達手段さえも直にやるしかない。

おそろしいまでの人海戦術を駆使するしかないだろう。

うーん、ある意味一大巨大企業だな…あつ、国営だったか？雇用の確保だろうと、その時は結論づけた。

そんな大所帯であれば、入浴時間はバラバラで手の空いた者からどんどん入っているのではないか？

そこに少々知らない奴がいても、そこまで気にしないのではないだろうか？

また、マナーや習慣の違いが有っても、そこはリラックスタイム…あまり咎められない気がする。

と、こんな事をつらつら考えながら、人が居そうな本塔に向かっていたら気配を感じた。

前方に人影がひとつ、こちらに向かって歩いてきている。

こちら風で言えば、距離にして100メートル以上は離れている。

どうやらオレは無意識の内に、体内の電気を広範囲に垂れ流しているらしい。

その電気がセンサーの役割をし、オレに気付かせてくれた。

と言っても、他人には気付かれない微弱電流とおぼしき物だが…

それにこの時は、やはり知らない場所であり、自分では気づいて無かったが、かなり警戒していたのだろう。

勝手にオレの能力が発動していた。

それと、視力もかなり上がっていた。

月明かりに照らされているてはいえ、やはり薄暗かった。

しかし、この離れた距離でも相手の姿がはっきりと判ったのである。

その相手とは、眼鏡をかけた美人で巨乳のお姉さん、ミス・ロングビルだった。

表情はやや険しい、こちらを警戒してるのが判る。

流石は土系統のエキスパート、彼女もオレに気付いている。

土くれのフーケの名は伊達じゃない！

どうも微妙なエンカウントになりそうだった。

オレの事を使い魔として認識してくれてなければ、不法侵入者扱いだっただろう。

彼女は秘書としても、とても優秀だ。

たとい目的の為とはいえ、僅か2ヶ月足らずで人の顔、名前、行動パターンなど時間別に把握している伏がある。

おそろしいまでの情報収集力、分析力だ！って言い過ぎか、現代社会ならあたりまえかこれぐらい…

それに全員覚えるわけでなし、うん、普通だな、Bプラスで優秀な部類かな…

そういえば、フーケの犯行は原作なら7日後、虚無の曜日の夜だったか？

ということは警備体制の確認かな？

まあそんなわけないか、ここの警備はザルだって気づいてるだろうし…

お互いの距離が20メートルをきった所で、ミス・ロングビルの表情が急に柔らくなつた。

そして更に近づいたところで学院長秘書の顔、営業スマイルで自己紹介しながらオレに気さくに話しかけてきた。

やはり彼女はオレが使い魔であることを知っていた。

しかし、こつも表情が露骨に変わるとなんだかなあ…

前世ならあの距離だと絶対気付かず、コロツと騙されてただろうなあ…

内心やつぱり女は怖ええ！どこの女優だよっ！と驚愕してるのを隠し、初対面での無難なやり取りをした。

その後はお風呂に入りたい旨を告げると、彼女は快く了承してくれ、入浴場所にまで案内してくれた。

道すがら、ふと異世界などという概念の無い彼女ならどんな反応が返ってくるのだろうと好奇心にかられた。

それとなく、オレが異世界人であることを告げてみた。
結果としては彼女の仮面は崩せなかったかな？

彼女は平民になって4年目ぐらいだったか？

しかし所詮は社会人4年生、まあ最終的には大人な対応だったのは流石だと言っべきか。

一瞬だけ、キョトンとした彼女のレアな表情を見ただけ儲けたと思うことにした。

サウナ風呂は想像通りだった事と、オレの男の部分が想像以上だった…恐るべし主人公とだけ言っておこう。

味気ない入浴を終え、ルイズの部屋に帰ると、まだルイズはいなかった。

これ幸いと先程の感覚を思い出しながら自分の能力の事について考えた。

基本的にこの電気は、オレの体から常に溢れ出ている…まあ実際は垂れ流しだが。

この時は、人畜無害の誰にも気づかれない微弱電流、索敵ぐらいには使えるかな程度のものであった。

これが魔闘気とかだったら、カイ。ウ様みたいでなんかカッコいいのに…などともうでもいい事を思ったりもしてた。

ここから思考がそれ、北。の拳の事を、あーだこーだ考えているとルイズが帰ってきた。

そして、使い魔の役目、役割を一方的に押し付けてくるのだった。使い魔などする気のないオレは当然、原作知識を活かし優位に反論戦を展開した。

最期は養われる謂れも必要も無いから出て行く！と言えば、とにかく今日はここに泊まらせてあげる！と上から目線。

お互い平行線のまま時間切れ、就寝タイムとなりルイズはベッドにもぐり込み眠り始めた。

そしてオレは床に座り込み、今後の身の振り方の為にも自分の能力把握にしばらく努めた。

ルイズにバレないようにコッソリ試している内に慣れてきて、手足のような感覚でなぜか自由に操れるようになった。

新しい器官ができて直ぐに馴染んだ、というよりは、生まれた時から使い慣れたという感覚に近いものだった。

操り遊んでいるうちに、この電気を操る能力と呼ぶべきか、意外と使える反則級な能力であることに気がついた。

まず、体内から溢れてる電気だが、オレを中心に球状、いやドーム状にかなり広範囲にまで拡げる事ができる。

基本、球状に拡がっていくが、地中には深く拡がらない、せいぜい2〜3メートルくらいだろうか。

それはともかく、たとえば南の窓から見える森ぐらいまでなら簡単に収められる。

そして、収めた範囲いわばその空間内の情報がいつきに頭の中に流れ込んでくる。

まあ大雑把な情報だが、あそこに大きな生物がいるとか、向こうで小さい生物が飛んでるとかだ。

集中すればもっと詳しく解るかもしれないが、頭から煙が出そうなので止めた。

また指向性を持たして一方向にも伸ばせる事もわかった。
ちなみに縮小するのも簡単で、面倒臭くなったら切り離せたりもできる。

それと、微弱電流だけだと思ってたのだが、オレの意思で狙った所の電流、電圧をも変えられる。

しかも、なぜか魔法にも干渉できた…

面白くなり、指向性を持たして伸ばしたり縮めたりと遊んでいる時、今度は壁、天井、床などの違和感に気付いた。

とりあえず窓枠横の壁に直径10センチ程の電気を貫通させて、なんとなく違和感を断ち切るように力を込めてみた。
すると、その部分の壁だけが違和感がなくなっていた。

おそらく壁には固定化の魔法が掛かっていて、その部分の固定化だけを破壊してしまったたでも考えるしかない。

干渉できたといっても、まあこの程度なのだが、今のところは充分だと思えた。

なんとも出鱈目な能力に満足したオレは、2度目の人生を楽しく満喫しようとして心に誓った。

そして、当然こんな力を手にしたら、やってみたくなる事が男には必ずあるはずだ…

男と女が密室にいるのである……

そう、ちょっとした出来心、ルイズにイタズラ…能力を試してみた。
AVでよくあるエレキマッサージ、健康にもきつといいはず……彼女の敏感なところへ…

やがて彼女は…熱いのだろうか？シーツをめくり…

またどんな夢を見てるのだろうか？自分の手で…

いつのまにか大きく脚を…月明かりに照らしたされた彼女は…
いと艶かしかった。

最期に果てるときビクンツと仰け反り、満足したのかクテンっとな
った。

この時のオレは、スーパーハイテンションっ！

ベッドの縁にしがみつぎ、まさにっルイズたん、ハア、ハア状態！
クテンっとなられたときには、危うくパンツを汚しそうになった！
寝言までツンデレっ！…おそろべしルイズ！

この後のオレはやり場の無い衝動感におそわれた。
己の愚かな行動にしばらくの間、後悔する事になったのは言うまで
もない。

なんとか、荒ぶるムスコが鎮まるまで耐え抜き、今後の行動方針を
纏め上げた時には、朝日を拝む頃だった。

第3話（後書き）

つつ、ついに、クラウドの能力が明かされたっ！……まあ、使い方間違ってるけど、この主人公で大丈夫なのか？

第4話（前書き）

やっと回想もどきも無事、終了しました。
元係長クラードの戦い？がいま、始まる…
お暇な方は、読んでやって下さい。

第4話

南の窓から陽の光が差し込んでくるのを見ながら、この世界の未来、また未来の自分の姿に思いを馳せた。

ヴィットーリオ主導で起こされる聖地イベント…

そして3つの文明の融合、融和による風石問題解決…

大円団エピソード後のオレのゆるゆるウハウハなスローライフを…

まあ、単なるオレの憶測と願望だけなのだが…

結局一睡もせず、今日起こる出来事と自分のスケジュールをてらし合わせていると、俄に学院が活気づいてきた。

さて、そろそろルイズを起こすとするか。

「ミス・ヴァリエール、朝だ、起きろ！」

サイトは毛布を剥ぎ取っていたが、オレは肩を揺すっている…

なぜならボディータッチができるからだっ！

「はえ？そ、そう……って誰よあんた！」

「なんだ、寝惚けてるのか？まったく、オレはクライドだ！」

「ああ、使い魔ね。そうね、昨日召喚したんだっけ」

「ミス・ヴァリエール、認識が間違ってる。使い魔ではない。それに、誘拐されたんだ！」

「…あんた、諦め悪いわね。それより、服」

無言で、椅子に掛かった制服を手渡したら、ルイズはネグリジェを脱ぎ始めた。

とりあえず僅かながらも出るトコはでてる、乳。おつきさ良し、先つちよのポッチンはピンクだ！そして、下の…産毛だ！

今しか見る機会はないっ！常にその覚悟を持っていないとチャンス逃す…おやじとはそう云う者である。

「下着」

「どこにある？」

「そのクローゼットの、一番下の引き出しにはいつてる」

今度はクローゼットの引き出しを開け、てきとくに掴んだ白の下着を手渡した。

となりで下着を穿いている、色気のない穿き方だ。

…いやいや、まてまて色気のある穿き方ってどうやるんだ？

「服」

「どういう意味だ？」

「着せて」

「すまない、ミス・ヴァリエール…オレは脱がすのが専門なんだ」

「……あんだ、なに言ってるの？」

「いや…とりあえず初めてだけど…挑戦してみるよ」

そんなやり取りをした後、ベタベタとボディータッチしながらルイズに服を着せ、オレ達は部屋からでた。

部屋からでると、キュルケが同じタイミングで部屋から出てきた。

そして原作と同じように、キュルケがオレをダシにして、ルイズをからかいだした。

そのうち、使い魔のフレイムも部屋から出てきて、なにやら自慢まじりにキュルケに紹介されてる。

知識で知ってるとはいえ、フレイムはやっぱり迫力あるよなあ、なんて思いながらこっそりキュルケを観察している。

スタイル抜群、褐色肌のキュルケ、そのキュルケの一番興味をそえられる場所といえば……やっぱり右目だろう。

いつも髪の毛が覆い被さってるので、右目がどうなってるのか分からない。

なんとか見えないものだろうかとルイズの後ろでアングルが変わるように動いているのだが、微妙に見えない。

キュルケが話をしながらも顔の角度を変えるのだ。

そんな行動をしてたのだが気付かなかったのか、気にしないのか、オレを見つめながらキュルケが話かけてきた。

「あなた、お名前は？」

「オレはクラウドだ」

「そう…クラウドね……それじゃあルイズ、お先に失礼」

品定めするような眼差しを向けてきた後、そう言ってキュルケは颯爽と去っていった。

フレームは後ろをちょこちょこ付いていつている。

その後、悔しがってるルイズにオレ達も行かなくていいのか？と冷静に声を掛け、本塔に向かった。

本塔の1階にある食堂に入り思う事はひとつ、やはりデカイ！

そして食堂内には描写にあったように、100人が優に座れると思われる長いテーブルがやはり3つ並んでいる。

学年を表す3種類の色の違うマントを羽織った学生達が、それぞれ

のテーブルで歓談しながら座っている。

真ん中のテーブルの中間からやや手前、そこがルイズの席なのだろう。

その傍の床にオレのと思える食べ物、パンとスープ、いや汁が入った皿が置かれている。

しかし、目が良すぎるのも困りもんだなあ…やはり、ここらもサイトと同じ扱いか。

まあ、食事情も学院を去る理由のひとつにできるかもな…

「なあ、ミス・ヴァリエール、オレの目がおかしくなったのか？床になにやら皿が置かれてるのが見えるんだが？」

「見えるわね」

「一応、確認で聞くが…まさか、アレがオレの朝食でいいのかな？」

オレは立ち止まり、テーブルの上の豪華な料理と床の皿を見比べてみた。

「あのね？ここは貴族の食卓なの。ほんとと使い魔は、外。あんたはわたしの特別な計らいで、床」

「なるほど…ミス・ヴァリエール、その特別な計らいとやらは必要ない。それに今後の食事についてもだ」

外で待っていると告げ、オレは振り返りもせず食堂から立ち去った。

腹を壊さないかと不安ながらも水場の水で餓えを誤魔化し、食事の終わったルイズと合流して、教室の中にいる。

ルイズの隣に無理やり座り、教室を見渡せば学生と共にいろんな使い魔たちがいる。

カラスに鼻それに猫、そしてモンスターとしか思えない使い魔まで、本当にファンタジーな世界にきたものだ。

それにしても、タバサが居るのは予想外だ。

彼女にバレるとは思わないが、それでもやはり気にかかる。

それにオレは、もうてっきりタバサはシルフィード……今はまだイルククウか？の救出に向かっているかと思ってた。

食堂で見た彼女は白タイツでなく、白ニーソだった。

えっ！？外伝版なの？と一瞬焦ったあと、すぐにどちらであっても問題ないと思い直したのも記憶に新しい。

ここからゲルマニア国境までの道のり、そして時間をどれくらいかけたか不明だが追いついた時は夕方だったか。

とすればオレの推測では、7〜8時間はかかったのではないかと思っ
っている、最速で6時間だろうか？

推定追跡距離が最大300リーグあたりか。

北海道より少し大きいトリスティンなら妥当な線か。

若干ゲルマニア寄りにこの学院はあるのかな？

うーん、このあたりが俄か転生者のキビシイところだな…

現代感覚だと、現チャリで6時間、300キロ走破っ！

…シンドイな、それに時速50キロ、スピード違反で捕まるか？

そんなことを考えていると、土のトライアングル、ふくよかで優しい雰囲気のあるミセス・シュヴルーズが入室してきた。

しかし、ミスとかミセスとか、ここは本当に面倒くさい、未婚、既婚女性でいちいち分けるなよな。

オレなりに直訳すると、人妻女教師シュヴルーズまたは未亡人女教師シュヴルーズになってしまう。

…ダメだっ、レンタルビデオ屋でレーベルのタイトルに騙されて即借りしてしまう自分の姿しか想像できない。

肉づきの良い彼女の体に荒縄が…

苦しそうでいて恍惚とした表情の彼女に…

不貞をはたらいているという思いが…

さらなる咎めを求めて…

自分自身を追い詰め昂らせていく彼女に…

熟した…って、イカン、イカン、イカン！変な妄想モードに入ってしまった。

とにかく、やっぱりミス、ミセスは思考でも練習しとこう、そうしよう…

やっぱりメンドイからいいか、どうせ出ていくし…

オレの目標の為に第一ステップにあたるこの重要な場面で、どうでもいい事を考えれる相変わらずダメな自分…

ふと我に返り教室を見回せば、小学生なみのやり取りがあったのだろう、注意を受けている生徒たちがいる。

しかし思っこんな場面とかがあるから、二次小説で学園扱いされるんだろうなあ

…小学生からエスカレーター式？

学院って、オレのイメージだと私立の大学なんだが…

ここって由緒と伝統のあるらしい国立の魔法学院なんだよな？

マサカっ！……オスマンの趣味？

とっ、また思考がそれた、とりあえずまだ大丈夫みたいだ。

とにかく今のオレのミッションは、ルイズに授業中に錬金の魔法をぶっ放してもらう。

その時、オレは自身の防御と彼女に電気ショックを与え、気絶してもらっただけでいい。

その後は当然、教室の大惨事の片付けもせず、堂々とルイズを抱えて医務室に逃げ込み自由な時間を作り出す。

そして、空いた時間で何とか接触し、彼女を口説き落とすしかない。

オレには、午前中の限られた時間しかないと思っている。

その理由はコルベールのおかげでガンダールブばれが起き、監視され始められるかもしれないからだ。

その後は、陰に陽にそれとなく監視される羽目になる、見ている相手はそんな気が無くとも…

また、能力でモートソグニルなど使い魔たちは察知できても、遠見の鏡などマジックアイテムは気付けないと思う。

そしてここではオレに、プライバシーの侵害は適応されないだろう…

かといってプライバシーを守る為とはいえ四六時中、気を張ってなどいられないし…

そんな思考を打ちきり、原作展開と同じになるようにルイズに話しかけた。

案の定、ルイズは見咎められ指名されて、教壇に立ち錬金の呪文を唱えている。

オレとシュヴルーズ以外は机の下に隠れている。

オレも自分の準備をし、いつでもルイズに電気ショック攻撃ができる状態だ。

そして遂にその瞬間、光と爆風に教室が覆われた。

オレは、すごい爆風にビビりながらもルイズを捕捉したまま電流を流した。

煙が晴れ、教壇があつた辺りを見ると、吹き飛ばされたルイズとシュヴルーズが倒れている。

シュヴルーズはたまにピクピクと僅かに動いている。

……ルイズは動いていないっ！

あれ？あれれれれえ……シンゾウガウゴイテイナイ？

オレの能力は電気を操る、電気の流れが解る。

そして心臓、これは一定のリズムで電気を流し心臓を動かしている。

つまり、心臓が動いている、動いていないなど瞬時に理解してしまうのだ。

「るっ、ルイズううううう！」

オレは叫びながら飛ぶようにルイズのもとへと駆け降りていった。

第4話（後書き）

たまに、はりきって仕事をするへまをする…
みたかつ！これぞ、おやじクオリティー！
なんのこっちゃ…

第5話（前書き）

やらかしてしまったクラウドくんが、反省したふりをしながら、思索にふける？の巻っ！

第5話

とりあえず今、ルイズと共に、水の塔3階にある医務室にいる……
よっ予定通りだっ！

ルイズに駆け寄り取り乱しながらも人口呼吸、胸骨圧迫、人口呼吸、
電気ショックいわばAED代わりだ！

一発蘇生、まさに奇跡だった！

心臓が活動し始めた後も、胸骨圧迫をする…

血液が止まった脳に障害が残らない為に！

もう一度、マウストウマウス…の矢先、オレの体は浮かび上がった？

レビテーションの魔法を掛けられたのだろう、ルイズから引き離された…

魔法を掛けたのは、騒ぎを聞きつけ駆けつけてきた、女性教師だった。

冷静さを欠いていたオレは、魔法を断ち切りなんとか着地。

なぜ、邪魔をする！とすぐさま女性教師に食って掛かった。

その時、女性教師はキョトンとしていた…

そのキョト顔を見たオレは急速に冷静になった。

まず、ルイズの魔法が爆発し、間近にいた二人が黒板に叩きつけられた事。

その影響でルイズが心肺停止状態になった事…

やむを得ず、自分の国に伝わる応急処置を施した事を伝えた。

そしてルイズが未だに、意識不明状態なので、医務室へ運びたい事…

それとルイズに何か羽織る物を用意してほしいとお願いした。

女性教師はオレの事を疑いの目で見た後、それでも、傍にいたメイドに指示をだし段取りをしてくれた…

とりあえずルイズにはパーカーを被せ、彼女の露出している部分を隠した。

本当はマズイのかもしれないが、自分が運ぶと強硬に言い張り、横抱きに抱えて医務室まで運んだ。

なぜなら彼女の気道確保と規則正しい呼吸、そして心臓のリズムを聞きたかったからだ…

はあ、失敗したなあ…

それにしても、よくまあこんな俄か救命隊員がわりのシロートで復活したよなあ…

しかしビビったとはいえ、高電流ながしたら、そら普通に死ぬわな…

やっぱ、高電圧でないと、スタンガンみたいに…

ホント、奇跡だよなあ…これが所謂、主人公補正的な強運？

…まさかギャグ補正？

そういや、ギャグ補正っていえば、サイトって頑丈だよな…

それに病気ひとつしないし……まさかつ！不死身？

重症の連続にもかかわらず、ケロっとしてたし…

何より、あれだけせつない処を蹴り上げ……想像したら鳥肌たった！

たしか、この医務室だったよなあ…

ティファニアとベアトリスのエピソードの後、窓ぶち破って飛び降りるのって…

オレは、窓越しに覗き込んでみた。

……普通に死ぬる、なんてったって3階だもの。

まあでも、ティファのミラクルな部分を揉んでいい思いしてたんだし…

あれ？でもサイトもあの時、死の予感感じてたような？

……まさかつ！これがホントのミラクル補正？

しかし、あの女性教師の蔑むような目、結構コタえたなあ…

まああの感じだと、魔法をオレに破られたって気付いたわけではなさそうだな。

どっちかっていうと、女生徒に淫らな行為をした変態痴漢野郎疑惑！うつ…

あとは、平民風情がつ！てな感情というところか…

まつ、当然っちゃ当然か…

ここには心臓マッサージとか人工呼吸なんてないだろうし、魔法でなんとかするんだろう？

知らない人間からすれば、気を失ってる女性に、キスして胸まさぐってる痴漢行為にしか映らないいな…

それに平民がそんな技を公開すれば、魔法を脅かす方法として異端かどうかの微妙なラインかな…

ブリミル教か…

ある意味ブリミルの呪縛…

まあ、ブリミルの名前だけが勝手に歩きまわっているが…

どちらかと言えば、少数民族だったマギ族の恐怖心ゆえの産物だろうな…

ブリミルの時代、いわばヴァリヤークの王達によって支配されてた時代みたいに逃げ回るハメになるなど…

おそらくこの、政治体制ってヴァリヤークがやってたのを模倣してるだけなんだろうな…

首の挿げ替え、ヴァリヤークからマギ族へと…

それが延々と6000年、愚民政治を…

まあ、愚民でなけりゃ統治できないわな。

特にブリミルを失なった少数のマギ族が10倍以上を…

しかし、ブリミルは偽りの生を、いったいどれくらい送ったのだろうか？

なんせ、エルフだからなあ、使い魔が…

それにブリミル、フォルサテ親子二代でって可能性も高いし…

うーん、わからんっ！まあどうでもいいか…

まあどちらにしても、初期のブリミル教って、知識、技術に対してはかなり神経質だったのではないだろうか？

特に平民階級の人達を厳しく取り締まったのだろっ…

平民は学んではいけない、団結してはいけない、それに武器に対する規制、あらゆるものに対して…

そして、ブリミル教会が平民の学舎というわけか…

いつしか、技術を磨くこと、力を合わせて試練に打ち克つこと、自分達ならできるという気概すら失なってしまった…

そうして第二、第三のヴァリヤークの芽を摘んだというわけか…

6000年、人間に無力感を与え、抵抗力を奪い、隷属化させるには充分過ぎるほどの時間だ…

しかし6000年かあ、上手い年代設定にしてくれたものだ…

こうすれば、風呂敷広げやすくなるもんなあ…

例えば、6000年毎に大災害がおきるとか…

そのたびに、一族内に救世主みたいな連中が現れたりして…

ブリミルの時代より更に6000年前、約12000年前だと地球の伝承、言い伝えなら、超古代文明滅亡か…

ムー大陸、アトランティス大陸などの伝説…

これらの大陸の末裔とかだっり…そーいや、これはエルフにも当てはまるか？

それに6000年前、地球では紀元前4000年あたりで、突如と

して高度文明が現れたんだよねあ…

チグリス、ユーフラテス川の間、下流域あたりに…

謎の多いシュメール人が興した、シュメール文明！

確認が取れてる人類最古の文明…

やがてメソポタミア文明へと発展、いや吸収されてしまう…

そして、この文明が日本を含め先進諸国、西欧諸国などに受け継がれている…

自然に抗う文明、自然と戦う文明、自然をコントロールしようとする文明という意味でなら…

こう考えるとやっぱりシュメール人で、なんとなく…てな展開かな？

しかし、そうなるとヴァリヤークが支配してた地域って、ハンパなく広大だよなあ…

少なくともこちらでの、イラクからハルケギニア全土か…

アルビオンが微妙で北欧っぽいあたりはどうだったのだろう？

しかし最大でも、ここのイランあたりからアラビア半島、ハルケギニア全土ではないだろうか？

まあ、アラビア半島があっただけど、なんせ、イベリア半島がないくらいだからな…

なんてこったいっ！リーガ・エスパニョーラがっ…

それはともかく、イランあたりと考えたのは、こちらでは、ロバ・アル・カリイエがあるからだ。

そのロバ・アル・カリイエの位置が地球でいえばインドあたりではないだろうか？

なんとなく、ヨーロッパの人達からの東方つて、イメージ的にインドかなってな理由だが…

そして、6000年前のロバ・アル・カリイエもそれなりの文明を築いているだろうという勝手な推測だったりする…

でも、いまではきつと…

もうひとつのアラビア半島できつたのは、やはりエルフの存在だ…

サハラと言っからには、どう考えてもアフリカ大陸だろう…

例えば、この世界のアフリカ大陸の砂漠化が地球と違っていた…

そして、エルフがエジプトのあつた辺りにいたら…

仮定の話だが、エルフの防衛線は突破できないだろうな…

エルフはどちらかといえば、防衛戦の方が得意なのではないだろうか…

エルフは精霊の力を行使する、その土地にいる精霊と契約を交わし強力な魔法が扱える。

ルクシヤナも言っている、ひとつの都市を吹き飛ばすことも、やろうと思えば簡単にできると…

ただ、サーシャが言っていたように、争いに使いたがらない描写もあったのでこれは個人的意見なのかどうかは判らないが…

まあ、そのエルフが拠点を築いて防御に徹したら、生半可な攻め方ではくずせないだろうな…

その土地そのもの、いや自然そのものが敵として立ちほだから…

まして災害クラスの魔法すら有り得るわけだし…

ハルケギニアの人間が、ガリアの東端にあるアーハンブラ城を取り戻しという描写がある…

オレは軍事のシロートだが、これくらいなら分かる…

エルフが戦略的に無意味と考え、退去したのだろう…

その理由としては、その時代あたりで、船の性能、操船技術が向上したと考えればしっくりくる。

それまでの聖戦は陸路で大軍団を送り込む戦略をとっていた人間たち…

しかし、聖地は海にある！

そして、聖地には場違いな工芸品がある…

それを盗りに人間たちは空海路を使って、船でくるようになった…

エルフ達にとつては、自分達の住んでる所から、ずいぶん離れた場所
所で防衛する意味も意義も無くなった…

ロマリアって、たしか位置的にギリシャだったよな…

どうにか往復もできるんだろう…

それに、ハルケギニア版どこでもドアもあるしな…

そう考えるとギリシャだと位置的にいえば最前線か…

ロマリアの国の在り方も古代ギリシャに似てるし…

何より、ヴァリヤーグって呼び方が、古代ギリシャのバルバロイや
バルバロスなどの呼称にそっくりなんだよな…

そしてサイトの夢、リコードの魔法で見せられた、ブリミルとヴァ
リヤーグの戦い…

あれって古代スパルタやアテナイの人達と20万、50万とも云わ
れてるペルシア軍との戦いをモチーフにしたんだろうな…

エルフはブリミルが巻き起こした大災厄後に空白地帯になった土地
に進出したのかな？

エルフが何処に住んでたのか謎だが、今は描写にもあったハルケギニアの東にある海洋都市…

そして、聖地はやっぱり、地球と同じ場所なんだろうか？

まったく、北欧神話を隠れ蓑にいろいろ謎を作ってくれるから俄か転生者には、さっぱりわからん！

裏主人公のアイツなら、きっと知ってるんだろう…

くそっ！そんな事はどうでもいいっ、それよりも左手のルーンだ！

やっぱり消えとらんがな、残ってまんがな…

つつことで、やっぱりオレが死なんと無くならんのやね？

ジョセフが死んだ後、シエフィールドがフリゲート艦諸とも自爆した描写はたしかに微妙だったな…

アレはミヨズニトニルンの能力使ったんだあ程度に読み流してたし…

ん？リーブスラシルの能力ってわけだけではないって事が…

それにしてもアノ野郎っ、ホント悪辣だよな、たくっ！……

しかし、このルーンはホントに呪い級って、まてよ…

オレの能力で……、まあ、いいかあ、面倒くさいし…

とりあえずこれで、虚無が死せども、ルーンは消えずと、てきとうな名言みたいなのはわかったし…

でも実は時間の経過と共に、経年変化とか酸化とかして錆びてきたら嫌だなあ…

さび止めスプレーとか無いだろうし、有ったとしても定期的に体にさび止めスプレーって……

うん、やっぱり固定化の魔法かな？

さてと、そろそろ行くかあ、ルイズもとりあえず心配なさそうだし。それに、いま目覚められてもこまるしな、身動きとれなくなりそうで…

あとは、医務室にいる人達に任せて、オレは本来の任務にもどらせてもらう…

決して忘れてたわけじゃないっ！……たぶん？

第5話（後書き）

次話はついにつ！アノ人にアタックっ？

第6話（前書き）

今回は、クラウドくんがなけなしの知恵を使ってきつかけ作りに頑張りますが…

第6話

つつ、遂に、やって参りました！本塔5階、宝物庫前に…

しかし、描写にもあつたが、目の前にある鉄の扉はデカイ！とにかくデカイ！

そして、鉄の扉には門が取り付けられ、更に門にも、大きな錠前が付付けられており完全防備になっている…

うゝむ、このおっきな錠前を仮に開けても、扉開けられないよなあ…

そうかつ！オレの左手には、たたり神からの呪いがあるじゃないか！

きつとアシ。カのように…

あつ、でもアシ。カは右手か、それに呪いも広がらないし…

おバカな思考はとりあえず置いて…

武器を手にして、この扉をどうにかできるか微妙なところだな…

それにしてもこの錠前、鍵穴デカすぎっ！

鍵穴の中、丸見えて…

しかも、メチャクチャ単純な構造だし…

まさに開けてくれと云わんばかりだ、流石はファンタジーってところか…

でもこれって、簡単に錠前破りできるよね…

………見えるっ！見えるゾっ！

あのマチルダに、ロケランプレゼントして、嫁ゲットした未来のオレの姿がっ！

そんな妄想でテンション上げてると、人の気配を感じた…

階段を見上げると、ロングビルさんだ…

フツ…けっ、計算通りだ！

「あれっ…こんにちは、ロングビルさん」

「あら、あなたは…クラウドくん、こんにちは。どうしたのですか、こんなところへ？…学院長にでも？」

「いえ、時間が空いたので…学院の探索でもと思ってブラブラしてたら、この大きな扉があったので」

「そうですか…ここは学院の宝物庫になりますから、クラウドくんは…あまり近づかないようにしませんがネ」

彼女は、オレを気遣うように、やさしく微笑みながら諭してきた。

なるほど、ここで目立たれると自分の目的に支障をきたすんですよ

ね、解ります、メガネのお姉さんっ！

「やっぱりそうですよね…今のオレって、平民でしたっけ？それにこの錠前、簡単に開けられそうだし」

「えっ！？」

「いや、だから簡単に開けられるでしょ、鍵なんか無くても…マズイですかね、この話題」

「い、いえ、大丈夫ですよ…クラウドくん、それでどうして簡単に開けられると思うのですか？」

「さつき、鍵穴覗いたら単純な構造でした。これ位の平たい棒があればオレなら簡単に開けられますよ」

「そっ、そうですか…ちょうどよかったですわ、クラウド君、ちょっとお姉さんのお仕事手伝って下さるかしら？」

そう言いながら、彼女は杖を取り出し呪文を唱えた、おそらくサイレントの魔法だろう…

「ええ、かまいませんよ…綺麗なお姉さんの頼みならハハハッ」

「フフ、そんな事言っても、お姉さんは騙されませんし、何も差し上げられませんわ」

いえいえ、アンタが成功報酬ですから…

その後、彼女は30 سانتぐらいの鉄の棒を、二つ錬金して渡してきた…

しかし、ほうきを錬金って、いいのかよっ！

そして、予想通り簡単に錠前を開ける事ができた…

といつても、結局ロックの魔法解除するのに、電気能力を使っただけだが…

バレないんだよな、コレが…

あとは、門はレベテーションで、扉は念力の魔法で軽々と開き、宝物庫の中へとすんなり入った。

宝物庫に入ってからオレは、脇見もせず前を歩くロングビルさんにおとなしく付いていつている…

まあ、キョロキョロして何かを物色してるように思われたら嫌だしな…

…ウソです、すみません。彼女が歩きたんびに揺れるんです！

プリンっプリンって、その豊満なお尻がっ！

目を離すなんて、そんなバカげた選択ができるはずがないっ！

しばらく進んでいたが、彼女が急に立ち止まった…

おそらく見つけたのだろう、破壊の杖を！って、オレ、どんだけ尻
ばっか見てるんだ？

見てみると、細長い箱の上に、ロケットランチャーが置かれてある…

その前には、文字の書かれたネームプレートと思われる物もある…

破壊の杖とでも書かれているのだろう…

きっと彼女は、ほくそ笑んでいるのであろう、オレからは見えない
が…

その後も、進んでは止まりメモを取るという事を何度か繰り返し宝
物庫を出た。

オレは宝物庫にいる間中、喋り掛けたりせず、おとなしく彼女の後
ろで仕草などを観察した。

まあ、メガネをかけた知的なお姉さんに見惚れていたってところだ…

それに、ヘタに喋ると墓穴を掘るハメになるかもしれないからな…

そして、仕事の人に話し掛けるマナー違反もあんまりしたくない
しな…

おそらく彼女は、最悪の場合の逃走経路、ついでに盗めそうな品、
それにオレに対する警戒や使い途など考えただろう…

しかし、ついでに盗むのは勘弁してもらいたいなあ…

怪盗って呼ばれるならターゲットのみ、なんかコッチのほうがカッコいい！

宝物庫の扉を閉め、門を取り付け錠前に鍵をかけた。

鍵をかけたといっても、もうアン・ロックの魔法で簡単に開くだろう…

これでオレの役目もオシマイかな、あとは彼女を口説くだけっと…
食堂のある1階へと、二人で降りていきながらアピールをしてみたが、返事を濁された。

フツ、あたりまえだ！このオレに出会って間もない女を、口説き落とせる才能などないっ！

それに結婚したのも20年近く前だしな…

何より、なんで結婚できたのか自分ですら謎だからな…

あとは彼女に語った与太話と姉御気質、それに孤児属性に期待かな…

まあオレは、孤児っていうより迷子だよなあ…

それも世界をマタにかけたって…あれ？人生の迷子！？

まあ、もうどうでもいいか、それより、オレが語った与太話というのは…

一つめは、オレが目的のある旅の途中で誘拐まがいに召喚とやらで拐われてきた事…

ちなみに、目的とは自分の妻になってくれる女性達を探しており、その妻たちと幸せな人生を送る事になってたりする…

二つめは、月が一つしかないところに住んでいた事…

三つめは、帰れそうにはないが、べつに何処であろうとも、自分の目的は遂げられるので、近いうちにこの学院から旅立つ事

簡単に言えば、こんなところかな…

1階に着き、食堂手前で彼女とは別れた。

別れ際、彼女に二日後旅立つ事を伝え、旅立つにあたり調味料を少しわけて貰えるよう頼んでみた。

それと、迷惑でなければ時間が空いた時にでも文字を教えて！無理ならしょうがないかなと言っておいた。

しかし、どうしよう？このタガネみたいな鉄の棒…

結局オレが持ったままなんだが、この犯行道具…

あれ？これはもしかしてヤバいかな？

へタしたら破壊の杖盗難事件の犯人に仕立てあげられる可能性もあるな…

オレが旅立った後、破壊の杖が無くなってるっ！？てな事にでもなったら、真っ先に疑われるよなあ…

とっ、とりあえず、この鉄の棒処分だな…

そうだっ！裏の森にでも捨てに行こうっとな…

「はあ、しかし腹へった…。なんでオレが…」

愚痴は言っまい、己が選んだ道だ！

「どうなさいました？」

人の気配は感じていたが、まさか、このオレに話し掛けてくるとは…

振り向くと、大きい銀のトレイを持った…シエスタが立っていた。

なぜ？おかしい、このタイミングで…

世界の修正力か？…バタフライ・エフェクトっ、そういう事か！

「あっ、いやっ…なんでもない」

オレは驚いた顔をしてるだろう、しかし、彼女の視線は左手に注がれている…

鉄の棒を持った、ルーンを刻まれた左手を…

「あなた、もしかしてミス・ヴァリエールの使い魔になったっていう…」

「あぁっと、クラウドでいい、それよりかわいいメイドさん、お名前は？」

「かwつ、しつ失礼しました！ここでご奉公させていただいてる、シエスタっていいいます」

「そつか、シエスタって言うのか、かわいいね！それと、残念だけど間違ってる…オレ、使い魔じゃないんだよね」

「え、でも…召喚の魔法で平民を呼んでしまったって…噂になつてますわ」

「ふゝん、噂ね…しかし召喚かぁ、応じたつもりも無いオレからすれば、これって誘拐なんだけどね！」

「誘拐って！そんな事、いまのを貴族の方にも聞かれたら、大変なことになっちゃいますっ」

「大丈夫だよシエスタ、そんなに慌てなくても、それにオレ（グウゝゝう）…」

「…もしかして、おなかすいてます？」

「…いや？」

根性のない腹のせいで、いろいろとダイナシになったがオレはある

ことを彼女に告げた…

そして食事を断り、困惑しながらも心配そうな表情をしたシエスタと別れ、森へと向かった。

第6話（後書き）

次話は、森の中での食料調達とクラウドくんのダメっぷりをカミン
グアウト？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7282y/>

ゼロの使い魔～元係長よ永遠に！～

2011年11月26日18時52分発行